

【ポスターセッション】

“見えない・見えづらい”高齢者支援に用いるために作成した アセスメントシートの妥当性の検討

○ 武蔵野大学 渡邊 浩文 (5577)

高田 明子 (武蔵野大学・5235)、矢野 明宏 (武蔵野大学・4501)

大島 千帆 (埼玉県立大学・5036)、下垣 光 (日本社会事業大学・8557)

キーワード：“見えない・見えづらい”高齢者、アセスメントシート、妥当性

1. 研究目的

本研究において“見えない・見えづらい”高齢者とは、日本眼科医会の研究に基づき「眼疾、あるいは視覚障害により日常生活においてみることに何らかの不自由を感じている65歳以上の者」とする。地域で生活する“見えない・見えづらい”高齢者は約118万人と推計され、生活の不自由さや安全へのリスクから支援が求められている(2009年日本眼科医師会)。“見えない・見えづらい”高齢者は“見えない・見えづらい”ことによる生活の困難・不自由さや安全へのリスクへの対応ばかりでなく、心身の健康や日常生活の状況など包括的なケアが求められている。しかし、高田ら(2015)の調査によれば、地域在住の高齢者は“見えづらさ”によるニーズが潜在化していることが明らかになった。

そこで、“見えない・見えづらい”高齢者支援に用いる第一次アセスメントシート(在宅の支援対象者をキャッチアップする)と、第二次アセスメントシート(ニーズを丁寧に把握し支援へ結びつける)を作成し、“見えない・見えづらい”ことによる生活のしづらさを感じている高齢者に必要な支援に結び付ける方法を検討することとした。第一次アセスメントシートは、ヒアリング調査、文献調査により作成した暫定案について、視覚障害リハビリテーションの専門職及び高齢者福祉の専門職によるグループディスカッションを行い試案を作成、当事者への適合調査を経て、「見えにくい高齢者のためのアセスメントシート(案)」を作成した。本アセスメントシート(案)は5領域(視機能、移動能力、生活状況、外出状況、関心のある支援)の29設問から構成されている。

本報告では、本研究の一部として実施した、アセスメントシート(案)の各項目の評価結果と、視覚に関連した健康関連QOLを測定する尺度であるThe 25-item National Eye Institute Visual Function Questionnaire(以下、NEI VFQ-25)との関連性の検討結果について報告する。

2. 研究の視点および方法

NEI VFQ-25を構成する12の下位尺度のうち、「運転」を除いた11の下位尺度得点及び、鈴嶋(2005)らに従い「運転」「色覚」「周辺視力」「目の痛み」を除いた7つの下位尺度得点の合計得点を算出し、アセスメントシート(案)で設定された「視機能の

状態」「視覚障害や眼疾について」「一人で自由に移動できる範囲」「生活状況について」「外出状況について」「興味・関心のある支援」に関する各質問の回答グループ間の平均得点の差について検討を行った。調査は、都内 A 養護老人ホームにおける、「見えない・見えづらい」高齢者 40 名を対象に、アセスメントシート（案）を用いた面接については 2017 年 1 月、NEI VFQ-25 を用いた面接については、2017 年 3 月に同一利用者に対して実施した。

3. 倫理的配慮

調査は、社会福祉法人及び当該施設の調査実施の承認を得、日本社会福祉学会研究倫理指針「事例研究」「調査」を遵守し実施した。面接調査に際しては、調査の趣旨と方法、回答の拒否権、個人が特定されない配慮等を説明し了承を得た。

4. 研究結果

調査対象の性別は、男性 21 名（52.5%）、女性 19 名（47.5%）であった。平均年齢は 80.3 歳（MAX:101,MIN:69,SD:6.737）であった。身体障害者手帳の所持者は、36 名（90.0%）で、そのうち、1 級が 22 名、2 級が 14 名であった。下位尺度及び合計得点の平均値の比較については、t 検定、一元配置分散分析及び多重比較（Bonferroni）を行った。その結果、「Ⅰ 視機能について」の下位項目「視覚障害や眼疾について」が下位尺度「社会生活機能」($F(3,32)=3.228, p<0.05$) に有意差がみられた。「Ⅲ 生活状況について」の下位項目「ドアの半開き状態がわかる」及び「家庭内の物品の置き場が変わったときにわかる」は下位尺度「一般の見え方」($F(2,33)=3.474, p<0.05$) ($F(2,34)=6.119, p<0.01$)、「遠見視力行為」($F(2,33)=9.333, p<0.01$) ($F(2,34)=9.054, p<0.01$)、「合計得点」($F(2,34)=5.438, p<0.01$) ($F(2,35)=7.796, p<0.01$) に有意差がみられた。「ごみの分別」については、「合計得点」($t(36)=2.295, p<0.05$) に有意差がみられた。また、「Ⅴ 興味・関心のある支援」の下位項目「足腰のための運動や健康増進のための教室への興味」については「合計得点」($t(36)=2.210, p<0.05$) に有意差がみられた。

5. 考察

本調査の結果、アセスメント項目（案）のいくつかの項目と NEI VFQ-25 の下位尺度、合計得点との関連性が確認された。関連性が確認された項目は、調査対象が養護老人ホームの入所者であることを考えると妥当な結果であると考えられ、アセスメントシート（案）の項目の妥当性が一定程度、示唆された。

本研究は、平成 28 年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「地域在住の“見えない・見えづらい”高齢者支援に用いるアセスメントシートの作成」（課題番号 15K13095）により実施した。